

一般教育の現代的意義

山田 素子

近代社会の成長と共に学問の専門化が進んだ。しかし学問的には19世紀から20世紀にかけて、その勢いは増々先鋭化すると共に、一方分離化もみられた。それが尽きるかに見えるや、いわゆる象牙の塔がくずれ始め、フィールドワークが盛んに行われた。学会では‘interdisciplinary’という声と共に、21世紀を支えるグローバルな視野に挑む「学際」(岩波国語辞典第四版(1990)によるとinterdisciplinaryの訳語として、「国際」にならって昭和40年代に造られた語)的な業績が着実に実ってきている。これらは地球環境、人類的視点を包摂する時間・空間の問い直しである。

地球規模を視点のメジャーに据える学際的学問は文明の先端を担い、その方向を予見するものでなければならない。専門性が深い教養と相俟うとき、人類と地球の永続が適うのである。このような深い教養は liberal arts というよりは、liberal studies と呼ぶべきものである。

Longman の Dictionary of Contemporary English (New Edition 2nd Ed. 1991) の定義によると:

liberal arts: university subjects except science, mathematics, and practical subjects that prepare one practical subjects.

liberal studies: subjects that are taught in order to increase general knowledge and the ability to write, speak, and study more effectively, esp. when taught to older students in addition to their main subjects.

地球規模の時代的要求に答えていくためには、liberal studies のカリキュラムを具体化していく必要がある。従来の liberal arts は文系と理系を二分化する傾向にあった。その反省は、例えば「時間」の概念の問い直し、「科学すること」の再定義の試みから始まっている。「文化」の再定義、「宗教」「社

会」「人間」というキータームの定義の見直しから、過去の再発見が促され、試みられている。人類の過去の遺産を身近な現代に甦らせ、新たな可能性を創造する糧とするものである。このようなカリキュラムを具体化すべく個人的に推奨したいと思われる著作の一例は例えば次のようである。

- A. A. Mendilow Time and the Novel (1972)
Alan Bloom The Closing of the American Mind (1987)
Jacob Bronowski ... The Common Sense of Science (1951)
 Science and Human Values (1958)
 The Western Intellectual Tradition (1960)
 The Identity of Man (1965)
 The Ascent of Man (1972)
Melvin Berger Advances of Modern Science (1967)
Clifford Geertz The Interpretation of Cultures (1973)
Joseph Campbell and
Bill Moyers The Power of Myth (1988)
S. E. Frost, Jr., Basic Teaching of the Great Philosophers (1942)
Desmond Morris ... The Naked Ape (1967)

以上「一般教育」の現代的解釈を試みましたが、一般教育 (General Education) の「語義」と「現代という現実」との関係についての考察は次回を期したいと思います。